

<翻訳資料>詩にみる現代中国人民の意識：詩集「 いかなる台風にもびくともしない」より(上)

著者	井口 克己
雑誌名	社会労働研究
巻	24
号	1-2
ページ	295-358
発行年	1978-02-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018104

〈翻訳資料〉

詩にみる現代中国人民の意識

—詩集「いかなる台風にもびくともしない」より— (上)

井口克己

発表順序

第一部 編訳者解説

第二部 翻訳詩 (前半・四〇編)

翻訳詩 (後半・五三編)

第三部 人民詩創作に関する翻訳

資料五篇

本号

次号

詩にみる現代中国人民の意識

第一部 編訳者解説

〔翻訳詩集の性格〕

わたしは「芸術・意識社会学」を専攻している。とくに、文学作品を資料として、その構造を社会関係のうちに探り、作者と作品（作中人物の意識・詩中の意識）の相互関係をとうして、新しい各種の人間類型を発見創造するところに昇りつくことをもって研究の理想としている。わたしは、同時に文学作品の実作者でもあり、後者に対しては興奮さえおぼえる。当面興味の対象は、現代日本と現代中国・現代日本文学と現代中国文学である。研究は、原理論的なものと個別研究的なものに区分して進めている。今回発表の機会をえたのは、後者に属するものの一部分である。翻訳資料としてここに紹介するのは、中国現代詩である。詩集名を「いかなる台風にもびくともしない―小靳村詩歌選―」（原典は十二級台風刮不倒―小靳庄詩歌選―〔人民文学出版社・一九七六年・北京〕）という。一九七六年四月発表された、天津市宝坻県の亭口人民公社・小靳庄生産大隊の詩歌のアンソロジーである。

この詩集の成立に関しては、第三部に資料として、編者の「あとがき」を翻訳発表する。これに詳しく書かれているので、わたしの解説は必要最小限な一二のことにふれるにとどめたい。

第一に、この大隊がプロレタリア文化大革命（文革）以来「農業は大寨に学べ」と「批林批孔」という二大運動のなかでうかびあがってきた、先進的な典型地区であったことである。第二に、このことは、いわゆる「党内の悔い改

めない走資派」の「奇談怪論」(怪しげな議論)の批判的地となる結果となったことである。

「いかなる台風」(原語は『十二級台風』訳では『未曾有の台風』と訳したところもある。)というのは「右傾翻案風」(右からの巻返しフオンの風潮)詩では『右傾の逆風』と訳した。)のことである。台風フオンの眼ともいえるこの大隊は総反撃にでたが、詩歌による攻撃も強力なその一部であった。

この詩集は、出版当時中国ではもとより、日本の研究者によっても近年にない傑作詩集として評価をうけたように思う。わたしも一読して感動を覚えた。だが、なぜか誰も訳詩集をこころみず、紹介にとどめたにすぎなかった。このあたりに、中国研究者の苦悩と逡巡がうかがえた。すべてが、目覚めた政治的人間になることを理想として、新しい国造りを進めている中国人民の詩歌は、あつかいかた如何んによっては内政干渉にもなりかねず、かれらの意図に反することもありうる。かれらは生命と国家をかけて文学に対してしているのだ。遊びではない。このことをわたしも充分知っている。また、中国人民に対する日本帝国主義の残虐なかつての侵略の歴史をどうして忘れえよう。わたしたちは負目をもっている。日中友好に反することはしたくない。それは、日本人としての道義であり責務であろう。研究者といえども例外ではなく、困難な問題だが学問の自由に道義は優先するだろう。

「発表訳詩の背景」

あえて発表するには、方法と時期の考慮が必要であろう。初読の時点では、訳詩集によって人民詩を紹介することは、友好のためにも有意義だと判断した。毛主席の有名な言葉がある。「きみたち青年は、午前八時、九時の太陽のように、生氣はつらつとしており、まさに、伸び盛りの時期にある。希望はきみたちにかけられている。」わたしは

立派な中年のようだが、この言葉を愛している。中国において詩は興隆をきわめているにもかかわらず、日本においてはここ十年近く批判にたえうる中国詩の訳業はなされていかない。このことには不満であった。著名な研究者たちが手をつけがたいのなら、討ち死にしてもたいして惜くもないと思われているらしい、わたしがこの間隙をうめてみるのも面白いとも思った。そして昨年秋より今年初めにかけて約四百枚の下訳を完了した。この約半年の期間は、中国研究者にとって苦悩の時となったが、またとない天与の経験をもさぶかった。

この時、中華人民共和国は、シヨツキングにかつドラマチックな歴史的展開をみせた。一九七六年四月五日に「天安門事件」が発生し、同七日には中国共産党中央委員会の「二つの決議」（中国語で『兩個決議』）を「人民日報」が報じ、^{ホフゾフオン}華国鋒氏の中国共産党中央委第一副主席・中華人民共和国國務院総理任命と、「鄧小平の党内外のすべての職務を解任」した。同八月には未曾有の唐山地震にみまわれた。同九月九日には、かけがえのない「偉大な指導者・教師毛主席」が昇天した。^{チモウエンライ}周恩来國務院総理、^{チユドオ}朱徳人民代表大会常務委員会委員長を追っての「赤き巨星」の死であった。同十月七日、中共中央は華国鋒氏の中国共産党中央委員会主席・中国共産党中央軍事委員会主席就任を決議した。同月二四日には、華国鋒中共中央主席中央軍事委主席就任・「四人組」（中国語で『^{スイレンバン}四人帮』）反党集団陰謀粉粹勝利祝賀集会」が、天安門広場に軍民一〇〇万人の参加のもとにおこなわれた。

中国はうねりながら、一九七七年の新年を迎えた。この七月なかば、ニュースは中国における劉少奇の部分評価を知らせた。同月末には、自己批判をし「不死鳥」と騒がれつつ鄧小平氏が、党副主席・副首相・党軍事委副主席・軍総参謀長へと復活し、「四人組」は永久に追放されたことを知った。こうして台風は去っていったようであり、あとは承知のとうりである。

この期間に翻訳作業を進めていたことは、わたしにとって僥幸であったが、複雑な気持だったことも事実である。この詩集において鄧小平氏は、感情的ままでのすさまじい集中砲火をあびている。その鄧氏がトップに返り咲いたのだ。これらの詩を作った農民たちの心境は、複雑というより混乱さえあったのではないかと推察する。

文化大革命は、一九五八年の大躍進・人民公社化の行きすぎを調整した劉少奇の政策が、毛沢東マオツォトンから見て、中国革命の本質と成果に反する修正主義と考えられたことが決定的となってひき起された。毛夫人・江青チヤンチンと林彪リンビャオは、その先頭に立ち、「紅衛兵」ホンウエイビンを動員して、劉少奇の息のかかった党機関を破壊し、党の要人や学術・文化界の「権威」を逮捕し、労働者の「造反派」ツォオファンバイが革命委員会という権力機構を樹立した。

一九六九年四月の「九全大会」(中国共産党第九回全国代表大会)で、林彪は毛沢東の後継者と目され、劉少奇は永久に除名された。だが、その林彪もまた十全大会で除名された。そして文革について否定的見解も「紅旗」に発表され、「反文革」「脱文革」の傾向が始まったかにみえたが、一九七五ころより鄧小平氏らを中心とする復活した「走資派」に対する攻撃がはじまり、前記の「天安門事件」で鄧小平氏は失脚した。「走資派」(中国語で『当権派』ダシチヤンバイともいう)。批判とは、一九六三年にはじまる農村社会主義運動のなかで、当面の目標は、「共産党内で資本主義の道歩む実権派(走資派)」の打倒が明らかにされたことにはじまる。当初の批判対象は劉少奇であった。

一九六七年、文革による前記の革命委員会が成立すると、実権派はブルジョワ実権派とプロレタリア実権派に区別されるようになった。後者については、人民内部の矛盾として、団結―批判―団結の原則で処理し、かつて矢脚した幹部は「解放」されて革命闘争へと大量に復帰した。

復活幹部たちは、文革中のゆきすぎを修正しようとした。この脱文革的な動きに対して、文革派はふたたび攻撃を

開始した。文革派とは、プロレタリア文化大革命のなかで抬頭してきた、江青・王洪文・姚文元・張春橋などをさす。いわゆる「四人組」である。『四人組』は、中国語で『四害』とも呼ばれている。文革派の攻撃の中心は、復活幹部の象徴・鄧小平副主席であり、公然と批判する「走資派批判」にまで発展したのであった。その影は、故・周恩来総理にまで伸びていたという。鄧小平氏の復活とは、このように重い歴史的意味をひきづっていた。

〔訳詩発表の意図〕

わたしは、日本人である。中国人民のもつ矛盾は、中国人民自身が解決することだ。この翻訳は、第一には日本人のためにするものだ。と、こう考えても頭痛はおさまらなかつた。わたしもまた、下半身を俗世間にうめて生きていくからである。だが、この原則は正しいと思う。

今年春、中国を訪問する友人に、現在のこの詩集についての中国人民自身のうけとめかた、そして小靳庄大隊の詩人たちの考えかたを調べてもらった。その結果、この詩集を作りあげた人民公社は、四人組の一人・江青の影響がよいことが判明した。当時の中国はまだ激動中でもあり、友好の観点から出版はふさわしくないと考えた。出版を約してくれていた出版社の快諾もえて、文学作品・訳詩集としての出版は断念した。

とはいえ、この詩集がもつ文学的価値、資料的価値はその歴史的意義をなんら減じておらず、今となってはことに貴重であると思う。一般読者への影響はそれなりの配慮が必要であり、文学作品としての発表はなお今の時点においても見合すべきであろう。だが、学生の参考・研究者の資料としてはかけがえのないものであり、学術雑誌への発表は有意義であると考えるにいたった。

当然のことともいえるが、節度ある学問研究と現実政治は相対的に独自性を保つべきものとの立場をわたしはとる。中国側において、現在は政治的に一段落ついたことも、わたしが「資料」としてこの訳詩を発表するゆえんである。政治に憶病すぎるところに、学問の花は咲かぬ。このことは、中国人民・指導者、なかんづく鄧小平氏もご承知のことであり、笑って納得されることと信ずる。

中国を研究する者にとって、政治・経済の側面について知る資料はかなりある。生活や風俗については訪中して見聞することである程度の判断もつく。しかし、わたしのように現代中国人民の意識を対象とするとき、あまりに資料の乏しいのに困ってしまう。わたし自身の資料による研究や、訪中経験によってもそう感じている。このことが、日本における現代中国研究の不安定さと、自信のなさの遠因となっているともいえよう。これは、社会体制のことなる日本のように、社会学者などによる意識調査などの少ないことにもよる。（この点については、中国も現代社会学の有効性を認めて導入されるとよいと思う。）また、社会主義国における人間の意識が、資本主義国ほどに分散・多様化していないことにもよる。とはいえ、いやそうであればこそ一層、わたしは、かれらの意識をミクロに知りたいのだ。中国人といえども、人間の条件、存在の拘束性を拒否して生きているわけではないのだから……。

小説家は、真実をのべるための嘘つきの名人である。しかし、抒情詩人は一回かぎりの真実を一枚一枚とつみあげていく煉瓦工である。偽善者は本物の詩人には育ちえない。嘘つきに詩は書けない。詩こそ不可解な人間の魂にもっとも近づきうる神の手であり、表現であろう。意識研究にとっては、またとない資料ではないか。

とくに意識の集中的研究には、小説より詩の方が有効であろう。ここにみる多くの中国人民詩・政治的抒情詩は、ドラスチックではあるが、幸せな時代を生きている中国人民の、多くの魂・意識のひだを読みとらせてくれることだ

ろう。

〔詩の選択基準と翻訳〕

この詩集は、総数一五九篇の詩歌よりなっている。わたしはそのすべてを翻訳したが、本誌へはつぎの基準によりこの中より選択した。(一)ある程度の分量がないと、資料としての信憑性が弱まること。(二)生産大隊内の全階層と老若男女を網羅することで、意識の全体像を把握したかったこと。こうして九三篇を選んだ。全篇発表が理想ではあるが、雑誌のスペースも考慮した。それでもかなりうまく縮小化しえていると思うので、充分資料として利用いただけると信ずる。

この発表稿は、下訳稿を整理したものである。文学作品としてのみ読んだ場合は、多少の不満はこのころだろう。時がめぐって、訳詩集として出版の機会でもあれば、さらにみがきをかけたいと思っている。資料としてはこれで充分よめるし、文学作品としても鑑賞にたえられなくはない。

文学としての訳詩集であるならば、訳注や重要語句（たとえば、『五・七の指示』（中国語で『五・七指示』）『はだしの医者』（同『赤脚医生』）『模範劇』（同『样板戲』）等）の解説もつけるべきだが、ここでは一切はぶいた。雑誌の性格から読者は、研究者・学生であって一般人ではない。前述の総合解説があれば、新聞による知識程度で理解できる。不明語句があっても、あとは詩そのものが理解させてくれるだろう。固有名詞・詩人名・重要語句には、中国語よみのルビをつけるのが丁寧だがこれもはぶいた。原注のみはそのまま訳出しておいた。

翻訳にあたり、詩題の同じもの・似かよったものは、その一部をとったり意識することで区別してある。内容に関

しては、わたしの語学力の許すかぎり原文に忠実に訳したつもりである。力不足もあろう。お気付の点はお教えいただきたい。

なお訳詩中で、「奴」とあるのは、原文では「鄧小平」又は「鄧」となっている。わたしの唯一の変節であるが、鄧小平氏が復活されて第二位の指導者の地位にある現在にあっては、一種の礼儀でもありお許しをいただきたい。

〔作品と内容〕

作品内容についても、資料としての観点から簡単におこないたい。中国において「詩」「詞」の伝統はながい。日本における短歌・俳句・川柳のように、参加しやすく発表も小説などに比べてスペースが少なくすむ。感覚的にいっても、韻文の覚えやすさは、重要視されている普及という点からみて利点である。労働者・農民・兵士・子供・指導者たちが、自分の思想・感情を託すのに詩を好むのはそんな理由からであろう。

現代詩の形式としては、長詩・詩劇・歌詞・組詩・詩画・翻訳詩などがあり、叙事詩風に抒情詩風にあつかわれている。

創作方法は、全体としては毛沢東の「文芸講話」の線にそっているといえる。新詩と旧詩および作詩態度については、毛沢東の「『詩は当然新詩を主とすべきである。旧詩は少しは書いてもよいが、青年に提唱すべきではない』という指示と、新詩は古典詩および民歌の批判的継承の基礎の上に発展すべきであるという原則に従って、詩歌の創作をさらに発展させ、『革命的内容と可能かぎり完全な芸術形式との統一』という目標に向って前進しなければならぬ」（中国の唯一の総合詩誌『詩刊』一九七六年一月号『編者のことば』より）という方向にあるようである。この

問題に関しても、第三部に資料を翻訳しておくので参考にしてほしい。

この詩集でみる限り、旧詩の影響はたしかにあるが、老若男女をとわず新詩的なものが中心になっている。わたしも文語調に訳す方が型の決るものがあるとも思ったが、学生の親しみ易いようにと現代詩風に清書した。

かれらは、革命的人民詩人であり、その詩の多くは政治的抒情詩と呼べるだろう。これらの詩は、類型的で似たものが多く簡明素朴にみえるが、よく読めば変化とユーモアもあり、なにより強靱さをもっている。これらの一人一人は、生きること喜びと苦るしみをおびつつも自信をもった詩人たちといえる。同じことを歌い、形がくずれかけても感動させてしまうのは、それが確かなポエジーとなっているからだとおもう。

詩の朗読会や競作会が多いことも、現代中国の特色であろう。ここに紹介した詩は、人民公社小靳庄大隊での詩競作会での作品が中心であり、農民の詩作参加の代表例である。この意味でも重要資料といえる。創作過程についても、中国の特殊性があるが、第三部の資料で補ってほしい。

政治的抒情詩によって「政治と人間」に関する意識は鮮明になっても、その他の生活領域の意識は不明だとの批判もあるとおもう。これは、わたしたちの感覚ではもったもなことだが、この詩集についてはないものねだりである。いや、その疑問に現代中国文学をもって答えることはかなり困難であろう。現代の中国人は、なんらかの意味において意識の中核に政治があり、自覚した政治的・革命的人間になることが理想であり、またそうである。このような人々だけが、詩をかいているともいえる。困難なことだが、別種の詩を集めて分析してみるのも、不満を補う一方法ではあろうかと思う。

資料としてではあっても、これらの詩を読むことは中国人民の魂にぶつかるといふことである。これはとても刺激

的なことであり、これこそ文学の最大の存在理由である。人民詩は手ごわく、日本の社会と人間のもつとてつもない矛盾の一面をえぐりだしてくるだろう。いまや、第三世界の文学は、文学の世界的前衛の役目をはたしている。このあたりで、中国人民詩をハンド・ミラーとして、日本人としての己の顔つきを確かめてみることも、また有意義なことではあるまいか。

この詩集は、人民公社の一生産大隊内部のみの人間によって創作されたものであり、資料としては意識調査の事例研究に相当するものとおもう。中国全土にわたる人民意識を確かめたい人は、わたしが既に上梓している「中国人民詩集一九七六年—文化大革命の轟き—」（たいまつ社。一九七七年十月刊）を、標本法による部分調査的なものとして利用していただきたい。冒険的ではあったが、後者の疑問に答える意味合いもあって、わたしはその訳詩集を作ったのである。これら二つの訳詩集をつき合せて、現代中国人民像をつくるならば、かなり確かなものができるだろう。文学作品を社会科学の資料とするとき、詳しすぎる解説はあまり有益ではないのでこれ位にしたい。個々の研究者の読みかたに負うところが大きいからである。

重複することになるが、この訳詩は研究資料であることを第一目的とし、わたしの全責任で発表したことを明確にしておきたい。すばらしい詩をとどけてくれた、中国人民に感謝するとともに、このささやかな仕事は、両国の友好に役立つならばこのうえない幸せである。

訳出にあたりご助言くださった、大学院博士課程時の指導教授・北川隆吉先生と、発表の機会をお与えくださった本誌編集部にたいし、心より感謝します。

一九七七年十一月一日

第二部 翻訳詩（前半・四〇篇）

いかなる台風にもびくともしない

——小斬村詩歌選——より

井口克己 編訳

毛主席が私達の胸の内を語り始めた

党支部書記 王作山

春風が万里を渡って祖国の家々を暖め

二つの決議が春雷の如く轟き

私達は頭をあげ涙ぐんで遙か北京の空を眺めた

毛主席が私達の胸の内にあるものを語り始めたのだ

二つの決議がこの村に伝わり

人民公社員達の革命継続の鼓動はさらに高まった

党は赤旗 私達は兵士だ

永遠に党に従って愛する祖国を築き上げよう

中央の決議は本当に素晴らしい

修正主義を批判し あの奥深く潜んでいる病根を掘りとりとう

表だため傷跡を根こそぎ取り除こう

勝利の威勢で戦馬を駆って更に進め！

詩にみる現代中国人民の意識

私達は心して「未曾有の台風」に立ち向って行く

剣の山も火の海も恐れはしない

毛主席の後について行こうと心に決めた

共産主義社会に向って大きく強くこの足を進めよう！

※一九七六年四月、中国共産党の中央は二つの決議案をだした。一つは華国鋒同志を中国共産党中央委員会第一副主席に任命すること。もう一つは鄧小平の党内外に關するすべての職務をはずし、党籍を保留し、今後の効果を見ようとするものであった。

勝利はすべて闘争から

党支部書記 王作山

長い歴史を紐解けば勝利はすべて闘争から生れ出たことがわかる

見よ 我等が村には新しい人が生れ潑刺とした闘志に満ちあふれ

闘いの哲学が生き生きと光を放っている！

文化大革命は洪水の如く激しく流れ進んで行く
牛蛇の邪神を政治の舞台から追い払ってしまおう
夜間学校を開いてマルクス主義を学び
大寨では大輪の花が紅色くれないに咲きほこった！

批林批孔の荒しは暴風の如くわき起り
良い家は清々すがしく生れ変わったが大部分の家はまだ埃にまみれている
古い習慣を払いのけ新しい気風を打ち立て
聳え立つ建物の屋上に赤旗を翻えそう！

去年の夏頃部屋はどこもかしこも
又もや怪しげな風と深い霧に包みこまれた
我等は立ち上って強風に立ち向い荒波と戦い
悔い改めない走資派を批判しよう！

階級闘争を永遠に忘れず
基本路線は心に深く刻みつけた

詩にみる現代中国人民の意識

詩にみる現代中国人民の意識

強風をかわし波を切って突き進み

万里に続く苦しい征途を力強く大股に歩いて行こう！

いかなる台風にも

びくともしない

党支部副書記 王 杜

風雷が鳴り戦旗が翻り

貧農下層中農の勇気は固い

胸に朝日を抱いて革命を起し

いかなる台風にもびくともしない！

夜間学校は強風に吹きつけられても その灯はさらに光り輝き

赤旗は雨に打たれてもそのはためきはさらに強い

“十個の新生事物”[※]の花は常に咲きほこり

風に向って音たてながら咲く花はなお愛らしく艶やか

無学な者が我慢ならず新しい詩を書きたいとい

音痴な人が我慢ならず新しい歌をうたいたいとい

強風に向って歌いその声は遙かかなたに響き

革命の闘志は高く雲をつき破る！

革命者は敢えて向い風に船を操り

毛主席は確かな手で舵をとる

階級闘争を燃える心に刻みこめば

マルクス主義は確かな航路を開く

敢えて闘争し敢えて造反し

月を引きよせすつぽん 鼈を促え虎や豹を追いはらう

毛主席が我等の後押しをし

いかなる台風にもびくともしない！

※文化大革命後、小靳庄の党支部は党の基本路線を守り、社会主義思想・文化をもちいて農村の陣地を占領した。小靳庄の人達は新しい思想に生れかわり、すがすがしい顔になった。「十個の新生事物」とは次のものである。(一)政治夜間

詩にみる現代中国人民の意識

学校を設けること。(二)貧農下層中農の理論隊伍を作ること。(三)貧農下層中農が歴史を教えること。(四)革命の模範劇を盛んにすること。(五)業余文芸宣傳隊を作ること。(六)大衆の詩歌活動を発展させること。(七)図書館を設けること。(八)革命物語りを教えること。(九)大衆の体育活動を発展させること。(十)風俗を改め、古いものを破壊し、新しいものを創ること。

心を赤く骨を硬く

党支部副書記 王 栄

共産党員は逞しい者

どこまでも毛主席の後にについて進む

共産主義の大目標を胸にいだき

風をさけ波を越えて果敢に

去年の七・八・九月ころ

狂犬は太陽に食くらいつこうと企み

未曾有の台風をひき起し

修正主義を売りつけた

良書を読み 風向きを調べ

深い霧を追いはらい 潮流を知った

無学な人の手に真理があり

陰謀策略を見抜くことができた

強風荒波を恐れはしない

我等は誠の心で勇猛に潮流に逆らい

修正主義に対決し

我等が挙げる無数の紅旗 その長い房飾りは力強く風になびく

後退に反対 復旧に反対

奸計を止め “右傾”を止め

奇談怪論を批判し

前進に更に拍車をいれる

闘争哲学を捨てまい

詩にみる現代中国人民の意識

詩にみる現代中国人民の意識

三二四

毛主席は路を教え 我等はそこにつき進む
我等は歓喜して赤い太陽を迎える 照らせ全世界を

革命の後継者

党支部委員

王彦芸

团支部書記

村に春風が吹き

教育にも革命の風がまき起り 紅旗がひろがる

貧農下層中農が学校を管理し

十七年もの黒い路線を踏みつけてしまふ

田畑だけが教室

基本路線がテキスト

我等は学ぶ 工業を 農業を 軍事を

向日花はみな太陽に向って咲く！
ひまわり

走資派は狂い叫ぶ “正規ではない”

“ 振じ曲げよ ” “ 振じ曲げよ ” 彼等は口がゆがむまでやめはしな

我等は “五・七” の光明の道を確信し

心して彼等と敵対する！

我等はほほえんで目前の新芽を見る

録の柔らかな芽はひどく可愛らしい

右傾の逆風を反撃し

大股でぐんぐん舞台にのぼろう！

奇談怪論を批判し

風波のなかで若い芽を錬磨する

マルクス主義は若者をはぐくむ

革命の後継者は一代一代すばらしく育って行く！

灯を讃える

党支部委員 王先

夜間学校の灯はきらきら光り

光は北斗星をさし示す

人民公社員は灯のもとでマルクス主義を学び
進む路上にくっきりと方向が見える

去年の七・八・九月ころ

窓ぎわに向って西風が吹きつづいた――

なぜ夜間学校は“文盲一掃”をいつているのか
なぜ我等の階級闘争の学習をやめさそうとするのか

貧農下層中農は逞しい

いかなる台風にも我等は敢てぶつかって行く

彼等が阻止すれば我等はもっと話す

大批判の旗を高くあげる！

目前の形勢は更によく

凱歌が響き東風は強い

北斗星は高く進路を知らせ

夜間学校を明るく照らし 教室の灯はひとときわ赤くなつた！

邪説を信じない

老貧農 魏文中

貧農下層中農は邪説を信じない

目が火のごとく燃え心は鉄のごとく堅い

冷風に逆らい 夜間学校を設け

馬鹿力をたのんでマルクスを学ぶ

陰気な風を恐れず

冷水に刺されることも恐れず

前進する一本の道を決め

詩にみる現代中国人民の意識

詩にみる現代中国人民の意識

九頭の牛の力にも引き戻されず

右傾の逆風に反撃する

これぞ美しい山河の色を変えさせぬその為だ

貧農下層中農は敢て邪道と闘う

批判の会議をにぎやかに開く

音痴でも模範劇の歌をうたいたい

無学者でもがまんならず詩をつくりたい

陰気な風を恐れず

冷水に刺されることも恐れず

前進する一本の道を決め

九頭の牛の力にも引き戻されず

右傾の逆風に反撃する

これぞ美しい山河の色を変えさせぬその為だ

“右に振じる”を批判する

生産隊副隊長 王樹青

走資派は後悔しない

彼等はどこえでも黒い手を伸ばす

陰險な手段で定論をくつ返えそうとし

革命路線を右に振り曲げようと妄想する

彼等は人を誑かす綱領ばかりの落とし穴を掘り

“唯生産力論”を売りつけに来る

彼等は新しい事物をみな抹殺しよう

天を換えて復旧さそうと画策する

貧農下層中農はいっせいに大声をだし

右傾の逆風を反撃しつつ我等が覇権を握ろう！

大批判の火は燃えさかり

毛主席の革命路線を右に振じる考えはやめたがいい

詩にみる現代中国人民の意識

新生物物は逞しく成長し

天と戦い地と闘い上流にせり登る

いかなる台風も恐れず

我等は革命をつづけもう振りかえりはしない！

老貧農の話

新入隊知識青年 苑 勤

伯父は会議から戻ってくると

オンドルのそばに腰をおろし煙草袋をとって

ぷかぷかふかし続ける

怒りに燃えているが話などしない

「どうしたの？」私がきくと

彼の閉じていた唇が開きはじめた

奴がまた昔にかえす仕事にとりかかろうとかまえとる

うち出された「三項目の指示を綱領とする」こいつの被害はごつい！

古い社会のときは——

おらあがきの時からふたおや両親に死なれ

至るところでもの乞いをし 家なんぞあるわけだねえ

地主のやつは極悪残忍で悪辣きわまりねえものよ

体にまだ鞭のあとが残つとるわな

いまの社会は——

毛主席が幸福のみちへと導いてくれる

ところが奴がまたぞろ車をひき戻そうとたくらみくさる

おらあ絶対にかかん

もう社会主義の道をいくことに腹をきめたのよ！

ちよつと来て

いっちょよう批判文をかいてくれ

おらたちの胸んちにたまっていることをしゃべらせてくれ

奴がみたがる「黄梁」の夢はもうやめたがええ

おらたちは二年間の罪をうけることなどもう絶対にはせん

貧農下層中農はいつまででも党の尻についていく

修正の主義に反対して 修正の主義を防ぎ でかい提防をつくろう
階級闘争をいつも忘れてはならん
こいつがおらたちのいいたい話よ!

孔子を批判しつづける

人民公社員 王 柄

孔子が "人を愛する" 格好で
高調な "仁義" の曲をうたい
政治舞台上^み上って三月たらずで
大喧嘩をはじめ屠殺刀の刃を血にそめた

林彪も "仁愛" を叫び

こっそり隠れてへ "571工程" 紀要▽をこねくり
敵に身を投じ国に反逆し化けの皮がはげ
銚を折って砂に埋め身を焼いた

後悔しない走資派の奴

やっているのは同じこと

口で「現代化」を叫び

新生事物に屠殺刀をふるう

三人だが二つの時代のこと

根も一本 道も一本

気をゆるめず孔子を批判しつづけ

必ずや修正主義を打ち倒すまで批判する

批判会

民兵 王育芬

眉に花火がとび

胸に怒濤がまき起る

詩にみる現代中国人民の意識

先輩貧農の伯父が舞台に上り

批判会ではじめて攻撃した

なぜ「いまは昔ほど良くない」

なぜ「教育は質量ともに高くない」というのか

貧農下層中農の目は鋭い

お前達のはへんてこな鬼のからくりだ！

右傾の逆風にあらたな攻撃をくわえ

怒濤はどんどん波をたかめ

階級闘争をあくまで忘れず

基本路線は心に刻みこめ！

いかなる台風が来ても吹きとばされはしない

波浪をむかえ闘志がたかまり

胸に朝日をいだいて革命をする

毛主席の革命路線を歩むのはすでに決定済だ！

青春を農業に

团支部副書記

新入隊知識青年

趙秀麗

足元の戦道は万里につづき

肩の重荷は千貫もある

耳元に毛主席の教えが響き

胸に全世界の風雲をつつむ

我等革命の知識青年

文化大革命のなかで育った新農民

気宇壮大に新しい絵をえがき

広大な天地に深く根をおろす

理論学習で心を赤く精錬し

詩にみる現代中国人民の意識

豪胆な熱情は火のごとく我等をさらに強くす
右傾の逆風を反撃する陣太鼓の音が響き
我等に勇気をあたえさらに軍を前進さす

なぜ「中学を卒業したら直接大学へ」というのか
「関心」のうちにおぞましい心が潜む
鋏を武器に陣地におもむき謬論を批判し
農業従事を心に決し我等が青春のすべてを捧ぐ！

この家を愛する

新入隊知識青年 除曉凡

陽光と雨露が新芽を育て
都会の娘が農村に行く
貧農下層中農は喜びいさんで出迎へ
私達は新しい家の整頓を助ける

実験田によい種をつちかい

隊長に教えられて「モーター」を動かす

練習をかさね手は太く骨は硬くなり

堤防を築き川を掘り私達はそこ力を示す

門前の広い道は太陽に向って果てしなくのび

裏庭の白楊木は遅しく聳える

夜は北斗星に向って良書をよみ

田では仕事をしつつ朝日を迎える

現場では心して下働きの人と議論を交し

夜間学校では心して野心家を批判する

闘争のなかで強い魂を育て

闘争すればいっそうこの家を愛する

農村への道は平胆ではなく

詩にみる現代中国人民の意識

陰気な風がひそかに吹いている

貧農の妻が目をしばたせ不隠な顔で笑い
両親を懐かしがっているのかと私に聞く

目は火をふき胸倉にみちたものが爆発し

批判会で口をきった

貧農下層中農はみな親戚

党への関心は両親へよりも強い

母から手紙がとどき

「心でなにを考えているのか」と私に問う

千言万語でも言いつくせはしない

返事にはただ四句をかいた

反修正主義と革命を考え

農村のために新しい絵をかこうと想い

山村や地方に行こうと心にかたく決め

私は一生涯この家を離れないと

天地に赤い花が咲く

新入隊知識青年 俞虹善

主席の指示が光を放ち

知識青年が農村に来る

広い天地に根をおろし

風雨のなかで良材に育った

老貧農は本を手に路線を講義し

我等に穀物と稗草の区別を教えてくれた

労働のなかで鉄の肩をみがき

反修正主義の手のひらに繭花が咲く

走資派 よこしまな考えを腹にもつ者

詩にみる現代中国人民の意識

流言を飛ばし 攻撃し 破壊する

“直接進学” は不正な心

“読み書きは官位につくため” 又もや古物の脚立けだちをとりだした

鬪争の風雨が目を清潔にし

香わしい花と毒草の区別がついた

脚立を取りはづし 後退に反対し

土塊を蹴って前進する

風雨にうたれて逞しくなり

農村に根をおろし 志をかえず

まめだらけの手で鋤を動かし どす黒い土を堀り

広大な天地に赤い花が咲く

社会主義の新しい花

紅小兵 于瑞紅

紅小兵たちよ集まれ

党内の走資派を批判しよう

人々の心に怒りの炎がもえている

批判の特別欄は砲台だ

激論の記録がはり出された

壁新聞は天地を覆う

一字一句は一万トンの砲弾

後悔しない走資派を砲撃する

教育革命の春は長くつづく

“五・七”の指示を心に刻み

日日基本路線を論じ

社会主義の新しい花が咲く

教壇に立った

紅小兵 魏素風

貧農下層中農が教壇に立ち

革命の先生と生徒が腹から笑う

マルクスの本を学び

階級闘争を心に刻む

古い制度を徹底的に破壊し

“五・七”の道は光を放つ

貧農下層中農が教壇に立ち

革命の先生と生徒が腹から笑う

教育権力を私達が手に握りしめ

反逆風が吹きつけても動じない

文化大革命の新生事物を讃え

毛主席の革命路線にそって前進する

新しい花に水をやる

女子民兵 魏紹華

毛沢東思想が航路を示し

大寨の紅旗が風に翻る

後悔しない走資派の奴

毛主席の革命路線に反対を唱え

でためにも「小を学び大を学ぶな」という

使っているのは誤魔化しの手

我等は毛主席について革命する

修正主義に反対し防御し夜間学校を創る

“十個の新生事物”が光を放ち

大衆は新しい社会主義の花に水をやる

胸のうちに真理があるから

詩にみる現代中国人民の意識

詩にみる現代中国人民の意識

女子民兵 魏永麗

百すじの川が海にかえり高波をつくる

“十個の新生事物”は青松の如く

文化大革命のゆたかな実をつけ

闘争のなかで着実に育ちあがった！

七・八・九月ころ陰気な風が起ったが

我等が胸には真理があり方向は明らか

階級の恨みがまたもや心にしみる

新しい花と毒草の区別はできる！

我等は社会主義のたしかな道を歩み

祖国の山河を永遠に紅くれないにまもる！

風波を迎えて

党支部副書記 王杜

風穏やかに手をたたき 水静かに弦をはじく

老若男女はみな役者

声高く模範劇の歌をうたい

戦歌が麗らかな空を呼ぶ

骨は硬く心は暖かにうたい

目は遙か万里にとぶ

陰気な風を吹かす走資派

我等は恐れず風に向い行く船をあやつる

英雄が私に剛の志をくれ

修正主義に反対し防御し歩みは毫もそれはしない

旗を掲げ綱をつかんで大寨に学び

赤い心と鉄の手で山河を改革しよう

日毎にうたい歌いつづけ

千難万苦も恐れず

詩にみる現代中国人民の意識

革命のなかで風雨など恐れはしない
風波を迎えて前に突進する！

はだしの医者

人民公社員 王 橋

はだしの医者は素晴らしい

一本の銀針と一束の薬草を手に

家々をめぐり診察する

漢方薬の効目はたかい

奴は「早苗」を恨み

「極左だ」「やり過ぎだ」と叫び

新生事物に反対し

はだしの医者をもろごと取締ろうと妄想する

貧農下層中農の怒りは消えず

激怒してスローガンを叫ぶ

医者不足薬不足の苦しみだらけ

彼が復旧を企んでも実行できはしない！

三結合は素晴らしい

生産隊副隊長 王樹青

教室の中は社員でいっぱい

みんな発言しようと争っている

右傾の逆風を反撃しよう

奴等は復旧後退し天を変えようと企んでいる

胸の怒りが鉄拳となり

スローガンを叫ぶ声が万天を震わす

走資派はいう「三結合は寄合いだ」と

詩にみる現代中国人民の意識

詩にみる現代中国人民の意識

どでかい中傷はでたらめ話

三結合は素晴らしい

老年中年青年 彼等の数をへらすまい

同じ心で団結して戦う

革命の大事業は世々代々ひき継いで行く

批判の火は消せない

民兵 王耀

朝日を胸にいだき大胆な心は逞しい

新時代の若者は成長し

風浪の切っ先がその威力をしめし

鋼鉄のような志に千万回も鍛えぬく

後悔しない走資派

彼等が震えあがるのは新しい力

鶏卵のなかに骨をさがし

手あたりしだいに絞殺し血ぬれた大口をひらく
投降派をかり集め
復旧の王におさまろうと企む
革命派人民は許しはしない
批判の炎が胸から吹きだし
右傾の逆風を厳しく批判し
黒風悪波をうち倒すまで批判する

伯母の家まで宣伝に

紅小兵 于瑞芹

私と金花ちゃん

但母の家まで宣伝に来た

伯母は私をオンドルのそばに坐らせ

批判会が始まった

伯母は鬢びんをととのえながらも

詩にみる現代中国人民の意識

その声だけは厳しく高い――

後悔しない走資派の奴め

反逆と復旧の罪は重大

どうして「今は昔とはちがう」というのか

どうして「三つの指示は綱領だ」というのか

奴等こそ綱紀を乱し人をだまし

こっそりと毒草の種をふり播く

奴こそ悪玉

舞台上に上れば車をすぐに引き戻す

またもや二年の罪をかぶせるつもり

この恨み私達は心にふかく刻みつけた

金花ちゃんの父さんは

九つこのの時から母さんがない

借金の低当かたで農奴にされた

何年間も切諫され

糠がゆばかり食べられ

家には瓦の一枚もない

農奴生活三十年

いまでも体に傷跡がある

話はまだつづいているのに

涙をぽろぽろ落していた

私と金花ちゃん

頬に涙がにじんできた

心のうちは恨みばかり

思いきり跳び上れば六メートル

“ハッ！”と私達は立ちあがり

口つくスローガンは天を震わせる

彼は車を引き戻そうとし

私達は臭い奴等を批判しつくす

毛主席に反対する者がだれだって

その頭をぶち壊す

伯母は笑顔をみせ

私達の頭をなせてくれた――

革命の責任は千貫の重さ

詩にみる現代中国人民の意識

詩にみる現代中国人民の意識

お前達が成長してくれるのを心のなかで祈っていると

大股に進もう

女子民兵 魏永娟

目前に広がる我等の村・小斬庄

どんな台風をも恐れはしない

毛主席の教えが耳元に響き

階級闘争は心に刻みつけた!

政治夜間学校でマルクスを学び

路線を見分け真偽を区別する

右傾の逆風を反撃し

革命し生産し大股に進もう!

貧農が舞台上に上り……

民兵副隊長 王孝友

貧農下層中農が舞台上に上り

花壇に文芸の赤い花が咲きほこり

毛沢東思想が光を放ち

胸にあふれる激情を歌いはじめた

貧農下層中農が舞台上に上り

花壇に文芸の赤い花が咲きほこり

右傾の逆風を反撃し威力を示し

社会主義の新風をうち立てはじめた

貧農下層中農が舞台上に上り

花壇に文芸の赤い花が咲きほこり

力をこめて模範劇をひろめ

帝王宰相を踏みくだく

詩にみる現代中国人民の意識

貧農下層中農が舞台上に上り

花壇に文芸の赤い花が咲きほこり

大寨中におし広まり

村人達は大豊作を手にいれた

貧農下層中農が舞台上に上り

花壇に文芸の赤い花が咲きほこり

歌いつくせぬ幾千万の歌

団結して戦いつづけ 美しい未来の国を造りだそう

新しい指示

婦代会副主任 于芳

新しい指示 新しい任務

革命を継続し意気はたぎる

右傾の逆風を反撃し

修正主義反対の大旗が心に舞う

新たにのぼる戦いの道に風雨は強い

力をかたむけて更にマルクス主義の学習を

心は晴れ目はすんで力は無限

強風をさけ波と戦い真新しい絵を描きだそう

新しい指示は戦いの道を照らす

社会主義は過渡の道

心して修正主義に反対し防衛し

共産主義に向けて大股に前進しよう

凱歌の中で

生産隊副隊長 王新民

詩にみる現代中国人民の意識

詩にみる現代中国人民の意識

大河は滔々と東に流れ

一瀉千里ふり向きはしない

革命人民は党に従い

凱歌の中で再び戦う

頭をめぐらせば困苦の歲月

常に詐欺師が黒い手をのばし

汚泥濁水が荒波をまき立て

船頭を右に振り曲げようとす

文化大革命の風雷が鳴り

旗は埃をまき上げ汚れた垢を吹き散らす

万里に広がる祖国は日々に新しく

鶯燕が歌いつつ舞い山野はいまも美しい

妖風濃霧がまたもや現われ

去年の七・八・九月のころに狂奔し

反逆し復旧しようとは妄想し

これに反対しあれを振った

羽蟻に大木をゆさぶることなど出来はしない

沈澱汚水がどうして洪水をせき止められよう

雲水は怒り風雷は叫び

革命人民は一気に戦いをひらく

風は叫び海は鳴って陣太鼓の音をせかし

山は揺れ地は動いて長い飾房りを翻し

紅旗は駆けのぼって凱歌を轟かせ

万馬は駆けめぐるって敵をうつ

警鐘は耳元になり我等は旗竿を固く握る

行くてに続く闘いの道

走資派がまたもやそこいらにうろついている

我等は船を止めて港に引きかえすことなどできぬ

詩にみる現代中国人民の意識

良書を読んで意志は勇壯

ふり返ることなく万里に続く戦いの道を行き

凱歌の中に再び戦う

我等は誓う 世界の隅々にまで紅旗を立てめぐらすことを

意志は固い

党支部副書記 王延合

共産党員の意志は固い

泰山が頭上に崩れかかろうと腰は曲らぬ

妖風濃霧を追い払い

革命闘争は日和を迎える

勝利は我等を励まし

戦馬に鞭をくわえ更に先へと促す

前進する路は険しい

マルクス主義を学び我等は敵と戦いぬく

妖風が起す千尺の荒波も

豺狼がふさぐ十重八重の道をも恐れはしない

毛主席が我等に方向を示してくれ

月を引きよせすつぽん 龍を捉え意気揚々と 歌をうたいつつ帰る

私は突撃する

紅小兵 王勤

私は毛沢東の紅小兵

党が号令をかけ私は突撃する

毛主席の教えを真剣に学び

右傾の逆風を反撃する

奇談怪論をねらい

詩にみる現代中国人民の意識

詩にみる現代中国人民の意識

奴の黒い綱領をねらい
筆をふるって突撃する
前進 前進 前進！ 攻撃 攻撃 攻撃！

一篇の詩は火

人民公社々員 王奔彬

右傾の逆風を反撃する
貧農下層中農が教壇に上り
一篇の詩は一団の火
轟音とともに大砲を発射する

後悔しない走資派
復旧し後退し腹黒い考えをいだく
弾丸は一つもそれず黒的を射
黄梁の美しい夢は埃と化した

批判の猛火

民兵連副指導員 王延光

東風が吹きすぎび戦場の
大鼓を打ち鳴し

批判の猛火は赤く空を
こがす

貧農下層中農は隊伍を
組んで参戦し

逆風反撃を決意した

事実を捉えて厳しく
批判し

怪論をねらって突撃
する

人民公社の天地は
広い

見渡すかぎり反修正主義の
鉄の長城がある！

詩にみる現代中国人民の意識

おばさんとお嫁さん達の
作詩競争の舞台

祖国を守る

婦代会副主任 戴王蘭

腹黒い奴等

“階級調和”を歌い上げ

目で原則を乱しあくどい策をねり

黒旗で我等の目を隠そうとする

理論を身につけた我等 もう二度と欺されはしない

日毎に階級闘争を論じ

党内の走資派を批判し

千万年祖国を守りつづける

赤いお嫁さん^{ねえ}達

赤いお嫁さん 巖慶栄

赤いお嫁さんが舞台上に上り

あふれでるのは胸の言葉

走資派は車を引きもどそうと企み

古い道へと踏みこまず

赤いお嫁さん達がやって来て

心を合せ走資派を批判する

我等の手には毛沢東思想の武器

修正主義の絵をひき剥してしまえ！

びくともしない

おばさん 鄭瑞香

詩にみる現代中国人民の意識

詩にみる現代中国人民の意識

走資派は華やかなてを使い

舞台に上ればすぐ復旧をやりたがる

私達には光り輝く毛沢東思想があり

風が吹こうと波に打ちられようとびくともしない

車は引き戻させない

おばさん 黄秀蘭

おばさんの私の気持は満足だ

指導員が授業をしてくれ

私達はマルクスも勉強できれば詩歌も書ける

車を引き戻そうとする走資派をてきびしくやっつけてやる

奴に向って猛攻撃

おばさん 斉心

おばさんの学習意欲は猛烈

毛主席の教えはとくと心に刻みこんだ

永遠にたゆまず学習し

私は奴に向って猛攻撃する！

世界中に紅旗が

おばさん 李桂蘭

党内の走資派は昔に返そうとし

おばさんが模範劇の歌をまねるのを攻撃した

ある人が恨めばさらに私等は歌い

世界中に紅旗が翻るまで歌いつづける

詩にみる現代中国人民の意識

英雄になろう

おばさん 于光会

どんなに凍らせても大蒜たいんにくは死なない
どんなに日干にしても玉葱たまねぎは死なない――
奴は舞台に上りまた凶悪な顔をだした
私等は模範劇の節で「極左」だとい
手にもつ針先が逆風に襲いかかる
私達の喉ははつきりと聞きとり
私等の声は鋭くとび出す

「紅灯記」「龍江頌」を声高に歌おう
英雄に学んで英雄になろう

革命を継続し突撃をつづけよう

修正主義を批判する

おばさん 趙関東

奴は昔に引き戻そうとし

模範劇を口ぎたなく攻撃し

おばさんはそいつを聞くと怒りの炎が燃え上る

私等は新鮮な花を摘みとろうとする者はもう誰だって許さない！

模範劇は革命の進軍号令

模範劇は闘争のすぐれた武器

彼が反対すれば私等はさらに歌い

修正主義を厳しく強く批判する！

たゆまず理論を

おばさん 陳振栄

たゆまず理論を学習し

あえて体当りし あえて関係し あえて闘争する

詩にみる現代中国人民の意識

詩にみる現代中国人民の意識

党内の走資派を批判し

年寄りの私も突撃したい！

たゆまず理論を学習し

心は澄み目は明るく力はさらに強まる

永遠に党に従って革命する

私は誓う 千万年祖国を赤く保つ！と